

2023

RCSS

Research Center for Science Systems

第一線の研究者による、学術振興シンクタンク
学術システム研究センター



独立行政法人
JSPS 日本学術振興会
Japan Society for the Promotion of Science

研究者と共に歩むセンターを目指して



学術システム
研究センター所長
大野 弘幸

学術システム研究センターは、平成15年7月1日に日本学術振興会に創設されてから、今年は20周年を迎えました。設立時の第1期の先生方の血の滲むようなご尽力、それに続く先生方の献身的なご協力がセンターを支えております。これまで当センターに所属した研究員は延べ830名のほります。

日本学術振興会は、研究者には広く知られた研究資金配分機関ですが、科研費等の制度設計、審査委員候補者の選考、各種審査会の適切な運営に、学術システム研究センターの研究員として現役の研究者が関わっています。科研費の申請はいまや9万件に達しておりますが、公平・公正に審査が進むよう、全ての審査をウォッチし、審査制度の改善を進めるのが、当センターの使命です。すべての分野の研究者が当センターに所属していることは、ファンディングエージェンシーとして世界的にも例がなく、大きな特徴です。当センターでの分野を横断した議論は、おそらく本務の教育・研究組織では行われないことであり、オフタイムでの懇親会を通じた交流も含め、きわめて貴重な経験です。

これまでセンター研究員は各種審査会を円滑に進行させるための裏方のような印象を持たれていましたが、公正な審査を維持し、科研費や特別研究員制度を支え、改善して行く我が国の基礎研究の守護神とでも言うべき重要な役割を担っています。応用研究と基礎研究が両輪となって進むことが中・長期的な国策として極めて重要ですが、今日では成果重視の傾向にあります。予測を超える成果につながる基礎研究は地味ですが必須です。それだけに科研費を中心とする基礎研究を支える日本学術振興会の振興策は貴重であり、今後とも守り抜く必要があります。そのため、研究者の自由な発想に基づく申請を重要視して学術支援ができるよう、現役の研究者が意見を述べ、制度を設計・改善し、検証しております。

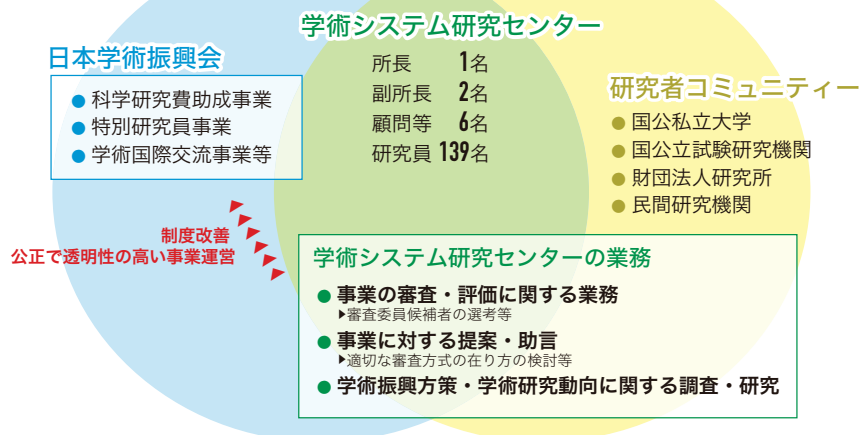
さらに当センターは研究者コミュニティに情報を発信し、意見交換を進めています。研究者と共に基礎研究を守り、学術を支援し続けるセンターを目指して、私たちは研究者コミュニティと共に歩んで参ります。

学術システム研究センターは、「科研費審査システム改革2018」のフォローアップ等、科研費審査制度の不断の改革へ積極的に取り組んでおります。学術の次世代を担う若手研究者の養成という大きな課題にも真摯に向き合い、我が国の学術研究のさらなる発展と、研究者支援のために尽力してまいりますので、皆様方の一層のご理解・ご協力、さらにはご支援をお願い申し上げます。

振興会と研究者コミュニティの
橋渡し役として、
学術研究のさらなる発展と
研究者支援のために

学術システム研究センターの役割

～公正で透明性の高い審査・評価制度、制度改善に向け、研究者コミュニティとの橋渡し～



副所長



岸本 美緒



西田 栄介

相談役



福田 裕穂

顧問



小林 誠



佐藤 勝彦



黒木 登志夫



村松 岐夫

研究分野は、未来です。

学術システム研究センターとは

学術システム研究センターは、競争的研究資金の効果を最大限に発揮させるため、厳正で透明性の高い評価システムを確立するとともに、研究経歴のある者が課題選定から評価、フォローアップまでを一貫して責任をもつプログラムオフィサー制度が必要であるとの、総合科学技術会議の提言「競争的研究資金制度改革について中間まとめ（意見）」等を踏まえ、平成15年7月、日本学術振興会に設置されました。

本センターの中核を成すのは、大学等研究機関に籍を置く第一線の研究者で構成されるセンター研究員であり、プログラムオフィサーとして、「ファンディングエージェンシーとしての振興会」と「研究者コミュニティ」との橋渡しの役割を担っています。科学研究費助成事業や特別研究員事業等において、審査委員候補者案の作成や審査会への出席、審査結果の分析・検証等、振興会の事業の実施に直接関与する傍ら、学術的な専門的見地から、最新の学術研究の動向や現場の声を事業運営に反映させることによって、研究者の視点に立った事業や制度運営を実現するために積極的に活動しています。

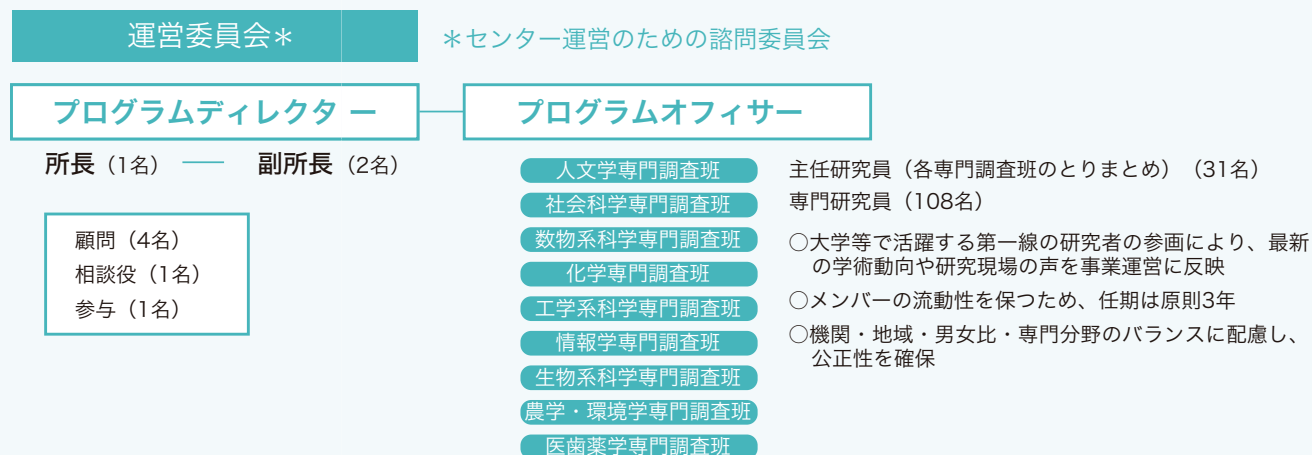
プログラムディレクター、プログラムオフィサー

学術システム研究センターでは、競争的研究資金制度と運用について統括する研究経歴のある高い地位の責任者である「プログラムディレクター」として、所長1名、副所長2名を配置し、センター全般の運営について適切な助言を得る体制を整えています。

また、各事業の審査・評価制度に関する実務を担当する「プログラムオフィサー」として、主任研究員31名及び専門研究員108名を配置しています。研究員は、原則、人文学・社会科学から自然科学までの全分野をカバーする9つの専門調査班のいずれかに所属し、専門分野の特性に応じた活動を行います。

研究員は、大学等研究機関に籍を置く第一線の研究者のうち、優れた学識経験を有するとともに、審査・評価業務に対し、公正かつ適切な判断が可能な者としており、日本を代表する研究者で構成されています。新たな研究員を募集する際には、広く全国の研究機関に候補者の推薦を依頼し、優れた人材の確保に努めています。

組織図



(令和5年9月1日現在)

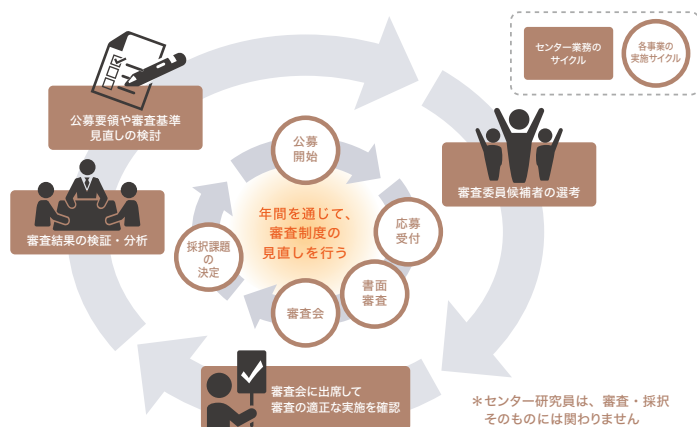
*ホームページに研究員名簿を掲載しております。 <http://www.jsps.go.jp/j-center/po.html>

第一線の研究経験を、学術振興に活かすために。

1

よりよい審査制度に向けて、常にすべてを精査しています。

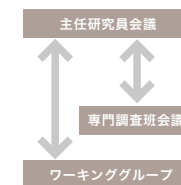
振興会では、あらゆる学術分野における独創的・先駆的な研究を支援するため、研究者の協力のもと、ピア・レビュー（専門分野の近い複数の研究者による審査）による研究課題の審査・評価を行っています。学術システム研究センターでは、第一線級の研究者であるセンター研究員が、ピア・レビュー制度の根幹を支えるため、審査結果の検証にもとづき、本会諸事業の公募要領・審査基準の見直し、適切な審査委員候補者の選考、その他審査・評価体制に関する提案・助言等を行うなど、よりよい審査・評価制度に向けて一貫的・継続的な取組を行っています。また、若手研究者の育成に資するため、日本学術振興会賞、育志賞における予備選考も実施しています。



2

様々な課題についての「議論の場」を設けています。

- **主任研究員会議**
所長、副所長、主任研究員等が一堂に会し、学術的見地及び各専門調査班での議論に基づき本会業務における種々の課題について討議・意見交換を行い、各種事業に対し提案・助言等を行います。また、審査・評価に関する諸業務の実施について具体的検討を行います。
- **専門調査班会議**
研究者のニーズや専門的な視点を本会事業の実施等に反映させ、より適切な業務運営の実現を図るため、専門分野の同じ主任研究員及び専門研究員が会して、意見交換を行います。また、主任研究員会議での議論に基づき、審査・評価に関する諸業務の実施について具体的検討を行います。
- **ワーキンググループ**
重要かつ継続的に審議が必要な課題に対して議論を行い、意見を取りまとめ、提言を行います。現在、科学研究費助成事業改善のためのワーキンググループと特別研究員等審査システム改善のためのワーキンググループが設置されています。



3

最新の学術研究動向調査を、業務に反映させていきます。

学術システム研究センターでは、国内外の学術振興方策や各分野の最新の研究動向について調査・分析を行うため、センター研究員を研究担当者として、学術研究動向調査を実施しています。国内外の学会への参加、研究集会の開催、学術研究関係者へのインタビュー等を通じて、各分野における課題の把握や今後の方向性の明確化を図っています。これらの成果は、センター研究員が審査・評価体制に関する提案・助言を行うに際して活用されています。

学術システム研究センター研究員は、大学等研究機関に籍を置く第一線級の研究者で、優れた学識経験を有し、審査・評価業務に対し、独立して、公正かつ適切な判断が可能なる方に就任いただいています。新たな研究員を募集する際には、広く全国の大学等研究機関に候補者の推薦を依頼し、優れた人材の確保に努めています。

学術システム研究センターでは、例年2月頃に全国の大学、研究機関に対して次期研究員候補者の推薦を依頼し、例年3月～4月頃に推薦を受け付けています。幅広い分野、研究機関からの推薦をお待ちしています。

学術システム研究センター研究員の選考基準

(1) 研究員の資格要件

- ① 優れた学識経験を有し、審査・評価業務に対し、独立して、公正かつ適切な判断が可能なる者
- ② 科学研究費助成事業若しくはそれと同等の研究費を研究代表者として受けた経験のある者又はその審査に関わった経験のある者

- ③ 大学等研究機関（科研費申請資格のある機関）の長が推薦する当該機関に本務として所属する研究者その他学術システム研究センター所長が推薦する者
- ④ 原則として大学等の機関・法人の長及び大学等法人の理事等の役員以外の者

(2) 研究員に必要な資質

- ① 優れた研究能力を有すること
優れた研究業績を有し、現在の研究活動状況等から、十分な研究能力を有すると判断できる者
- ② 専門分野を中心に学術研究に関する幅広い識見を有すること
特に、主任研究員については、学術全般に関する高い識見を有すること
- ③ 高い倫理意識を有し、公正かつ適切な判断が期待できること
- ④ 意欲があり、積極的な協力が期待できること



協働が織りなすシステム運営の妙

人文学専門調査班 主任研究員
(平成31年4月～令和5年3月)
東京外国語大学名誉教授
川口 裕司

フランス語にはC'est en forgeant qu'on devient forgeron。「鉄を鍛えることで鍛冶屋になる」ということわざがある。センター研究員にとっては、科学研究費補助金制度と若手研究者の育成システムをどのように鍛え上げ洗練していくか、それが主たる任務である。鍛冶屋の職能が他の人に言葉でうまく伝えることができないのと同じように、センター研究員の仕事

も経験を積み上げていくことで徐々に身につけていく。とはいえ、新たに弟子入りした新米研究員には頼りになる親友がいなくてはならない。だが心配には及ばない。学術振興会にはたくさんの優れた友人たちがいる。主任研究員が何なのかを理解しないまま始めた私のような者でも、3年間の任期がコロナ感染症のために1年延びてしまっても、つつがなく職務を全うすることができた(これは個人的感想だ!)のは、センター研究員と作業テーマごとに綿密に配置された担当者との協働作業によるシステム運営があったからだと思う。この点はこれからセンター研究員になれる方々も安心してほしい。思えば私は頻りに学振の方に質問をしていたが、それができたのも学術振興会が気軽にコミュニケーションをとることができる雰囲気作りで成功していたからなのだろう。

科学の健全な発展に貢献する コミュニティの一員となる喜び



社会科学専門調査班 専門研究員
(平成29年4月～令和2年3月)
関西学院大学人間福祉学部
社会福祉学科教授
今井 小の実

「たとえ何度同じ運命を辿ることになっても、私はまた同じ選択をする」。正確な表現は忘れたが、今も人気を誇る韓国ドラマの中の、生死を彷徨うヒロインが口にした諺言である。専門研究員の仕事はかなり過酷だ。けれども私も何度同じ運命を辿ることになっても、この仕事を引き受けるだろう。なぜなら、ここでの経験と出会いが何物にも代え難いものだったからだ。選考と検証、学術振興会賞候補の選定、制度への提言など、当初は理解が及ばず、異世界に迷い込んだかのような孤独に陥った。けれどもスタッフや同志の先生方の存在によって乗り越えることができた。そして今まで研究費を獲得するための手段としか思っていなかった科研費の制度が、公正で適切な運営のために、専門家と職員と研究者の不断の努力によって守られてきたことを知った。決して楽ではない行程に学術研究の発展を支える矜持と誇りを感じ、研究者として使命感を持って臨んできた。人文・社会班で開催される定例会の前の研究会で、各分野で活躍される先生方の研究に触れた時のワクワク感は忘れられない。業務と懇親会で培った人間関係は今も大切な財産だ。健全な科学の発展に貢献するコミュニティへの参加、その喜びと得難い仲間との出会いに感謝する。

スーツを着てセンターへ



数物系科学専門調査班 主任研究員
(平成28年4月～令和2年3月)
東京工業大学名誉教授
小島 定吉

主任研究員の務めを終えてからすでに3年4ヶ月が経ち、RCSSの様子もだいぶ変わったと推察します。以下は思い出話になってしまいますが、ご容赦ください。4年間務めましたが、普段ジャケットすら着ることがない私のスーツ着用率は、フォーマルな場のみで年間1%に落ちませんが、この期間だけは平均5日/1ヶ月 = 17%と異常な比率となり、それなりに背筋を直す機会となりました。スーツ&タイが義務付けられているわけではありませんが、周りに倣い自らドレスコードを設定しました。それに見合う恩恵は、一つは科研費や特別研究員事業の行政現場に触れられたこと、一つはハイレベルの役員・研究員の皆さまと交流ができたことがあります。いずれも締まった服装で臨み充実した経験をさせていただきました。コロナが始まった2020年3月に誠に残念ながら送別会なしで退任しスーツ着用率年間1%以下の生活に戻りましたが、なぜか気分は一押し、楽しい4年間だったと感慨深く思っています。

学術の多様性を支える科研費



化学専門調査班 専門研究員
(平成27年4月～平成30年3月)
東京大学物性研究所凝縮系
物性研究部門教授、東京大学副学長
森 初果

学術の原点はあくまで好奇心であり、個人が提案する基盤研究から、横断型の学術変革のようなグループ研究まで、多様な学術分野の研究を支えているのが科研費で、我々研究者の命綱であります。その科研費が、正当かつ公平な評価で配分されるよう、我々研究者が、学術システム研究センターの運営に参画させていただいたのはとても貴重な経験でした。さらに、日本学術振興会におけるシンクタンクとして、学術の発展を鑑みて5年に1度、分野やキーワードを見直したり、現場目線で科研費システムに意見を述べる機会もあり、研究者の思いを伝えられる重要な組織であることを専門研究員になって初めて知りました。センターの研究員だったのはコロナ前でしたので、会議は基本対面で、研究業務もセンター内で行っておりました。運営業務に追われる中でも毎月楽しみだったのは、研究員の先生から他分野の最先端の研究発表を伺い、そのあと四ツ谷での懇親会で多様な分野の先生方と四方山話が出来たことです。今も、その時一緒だった先生方とは交流させていただいており、人との繋がりや機会をいただいたのも財産だったと感じております。

扉の向こう側



工学系科学専門調査班 専門研究員
(平成28年4月～平成31年3月)
一般財団法人総合科学研究機構中
性子科学センター・サイエンス
コーディネータ
杉山 純

私が学術システム研究センターの専門研究員を終了したのは2019年3月末でした。と同時に、私企業である研究所会社から(一財)総合科学研究機構(CROSS)へ転職しました。CROSSは共用法に基づきJ-PARCの中性子散乱装置の共用促進を担う組織なので、私企業時代より科研費は身近になりました。そのような自分自身の環境の変化も合わせて、センター研究員時代を回顧します。まず科研費申請書類の審査過程をかなり詳細に追跡することに驚きました。次いで審査委員の選考の際に、不適切な選考とならないように配慮されていることに感心しました。さらに合議審査会への陪席を通して、審査の実状を目の当たりにしました。当時の学振理事の言われた「採択される申請書の書き方は分からないが、採択に至らない場合の理由を理解できます。」は名言でした。CROSS転職後もセンター研究員時代の経験は、国内外の大型施設の実験提案審査や研究予算審査で大変役立っています。科研費審査の公平性を保つためのセンター研究員の各種活動は、審査員を育成するシステムとなっていると思うのでしょうか。

楽しく実りある研究員生活



情報学専門調査班 主任研究員
(令和2年4月～)
神戸大学大学院システム
情報学研究所教授
大川 剛直

学術システム研究センターの主任研究員に就任して、3年余りが過ぎました。研究員の業務はウェブページ等でも紹介されているように非常に多岐にわたっていますが、中でも科研費審査会への陪席は、私にとって最も興味深いものでした。分野によって学術研究に対する価値観や捉え方が根本的に異なることに戸惑いを覚えずとも、審査委員の方々の学術にける真摯な想いをまざまざと感じることができました。また、様々な分野における最先端で挑戦的な研究内容をつまみ食いできる非常に楽しい時間でもあり、もともと自分の専門とは異なる分野に関心が行きがちな浮気性の私にとっては、思わぬ役得に心躍りました。一方、科研費WGの主査として、「科研費の審査の在り方」について議論させていただいたことも、大変有意義な経験となりました。これまであまり顧みることのなかった科研費の精神の真髄を垣間見ることができ、科研費制度が健全に運営され、継続的な改善がなされているのは、学術システム研究センターでの議論もさることながら、学振事務局の皆様のプロフェッショナルな仕事の賜物であることを肌で感じさせてもらいました。心から感謝申し上げたいと思います。この3年間、本当に楽しく実りある研究員生活で、残すところ数ヶ月となったことを少し寂しく感じています。

学術システムセンターの
調査研究活動について



生物系科学専門調査班 専門研究員
(平成31年4月～令和5年3月)
国立遺伝学研究所脳機能研究室教授
平田 たつみ

学術システム研究センター研究員として働いた経験は、私にとって楽しく有意義なものでした。科研費のしぐみより深く理解することができましたし、研究現場にどのような問題があるのかを知ることができました。好奇心が強い私にとって、多くの予想外の発見がありました。また様々な分野の研究員と知り合うことができたことも、とても有益でした。これらの経験は今後の財産になると確信しています。以上に加えて、毎年学術システムセンターの研究員として学術動向調査研究の報告ができる機会をいただけたことにとっても感謝しています。日々様々なことに興味をもって生活する研究者として、この機会を存分に利用して、毎年全く異なるトピックについて調査報告させていただきましました。公式に調査できるお墨付きをいただける上に、自分の意見を自由に発信できる機会をいただけるのですから、大変光栄なことであったと感じています。せつかくの調査結果をもう少し幅広く皆さんに届けたいという願いもありますが、毎年異なる研究関係者から反響をもらうことができて、この調査を通じて研究者の視点がある程度発信することができたと思っています。

科研費制度を未来につなげるために



農学・環境学専門調査班 主任研究員
(平成31年4月～令和5年3月)
早稲田大学大学院
先進理工学研究所教授
竹山 春子

歴史に残る新型コロナパンデミックが始まる1年前に農学・環境班の主任研究員を務めることになりました。専門研究員の経験もないところでのスタートだったこともあり、同じ主任の先生方、センターの方々には非常にお世話になりました。センターの業務を知るにあたっては、驚きとともに多くの先生方の真摯な働きによって科研費制度が成り立っていることが良くわかりました。コロナ禍ですべての会議はオンラインとなり、先生方との交流が限定的となってしまい本当に残念でした。コロナ禍が続いたこともあり、研究員の任期が1年延びて2023年3月までの4年間となりました。その中で、一番印象に残ったことは最後の2年間、特別研究員ワーキングの副主査、主査を務めたことです。特別研究員制度は日本の若手研究者、博士課程の学生にとっては非常に重要なものであり、今後の研究力の担い手の育成には欠かせないものです。一方、制度ができて以来その中身が時代に対応しきれておらず課題の解決がなされないままでした。特に特別研究員(PD)の非雇用状態に関する問題点を中心にWGで討議を始め、センター、文部科学省の英断で、PDが研究をする機関での雇用が可能になる制度がつけられました。センター研究員は、科研費の採択業務だけでなく制度設計に関しても踏み込んで意見を戦わせ、研究者環境の向上に資することも科研費制度を未来につなげるために必要であると強く感じた4年間でした。

研究環境の整備



医歯薬学専門調査班 専門研究員
(平成30年4月～令和4年3月)
東京医科歯科大学大学院
医歯学総合研究科教授
井関 祥子

センター研究員を務める前、この仕事を認識していたものの、どのような業務であるか知らずにいました。研究員として日本学術振興会の様々な事業に関与し、この業務が、研究の多様性を維持し、研究者がよりよい研究活動をするのできる環境を最大限公平に提供する事務方とのコラボレーションであり、やりがいのあるものだと思えました。私は医歯薬学班の所属で、月一度の班会議ではこの領域の最新の学術動向を知ることができ、また、業務をしている中で他の研究領域の動向を知る機会もありました。このように、研究環境に貢献するだけでなく自身の学びにもなり、有意義な時間でした。業務に大きな割合を占めるのは、やはり科研費業務です。科研費は研究者の自由な発想による研究を支援するもので、これが日本の学術を支える研究費であると考え、時代に合わせながらのより良い科研費システムの整備に微力ながら貢献できたことに感謝しています。任期2年目で新型コロナ感染拡大が起き、班会議がオンラインになりました。出席率は上がるのですが、対面でないため、他の研究員の先生方との関係が希薄になってしまったのは少し残念でした。今後も機会があればこの経験を生かしたいと考えています。

科研費改革2018を通して学んだこと



工学系科学専門調査班 主任研究員
(平成27年4月～平成31年3月)
特命事項担当(科研費改革推進等) 主任研究員
(平成31年4月～令和4年3月)
学術システム研究センター 参与(令和4年4月～)
東北大学電気通信研究所教授
尾辻 泰一

2017年4月に工学班主任研究員として着任したのがRCSSとのご縁の始まりでした。以来、4年間の工学班主任研究員、続く3年間の特命事項担当を経て、現在は参与として2年目を迎えています。9年間にわたるRCSSでの経験と人脈は、私の人生においてかけがえのない宝物となりました。その経験の中でも、科

研費改革2018は自身がセンターの一員として全量賭して取り組ませていただいた一大事業でした。「学びてその先に『問い』は生まれる。科研費は『新たに生まれた問い』に対する支援制度である」この言葉に科研費改革2018の精神が象徴されていると思います。新たな課題の発見に始まり、その課題に対して合理的かつ革新的な手段で見えない答えを自ら導き出し発見すること、それをScientific meritとして尊び、評価すること。ここに審査方式改革の理念が凝集されていると思います。RCSS入所当時に今は亡き初代副所長の石井紫郎先生の言葉として、当時副所長であった勝木先生より訓示いただいた「センター研究員は、歯がゆいほどに我慢強く、謙虚であるべき」という金言を鏡として、不断の改革に微力ながら尽くして参りたいと存じます。

お問い合わせ

独立行政法人日本学術振興会
学術システム研究センター

〒102-0083 東京都千代田区麹町5-3-1
TEL : 03-3263-1882
E-mail : rcss@jsps.go.jp
<http://www.jsps.go.jp/j-center/index.html>

